The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	<Book Review> Claude S. Fischer, Still Connected : Family and Friends in America Since 1970, Russell Sage Foundation, 2011
Author(s)	林原, 史明
Citation	年報人間科学. 2013, 34, p. 147-151
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/24977
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

〈書評〉

Claude S. Fischer
Still Connected: Family and Friends in America since 1970
Russell Sage Foundation, 2011

林原 史明

はじめに

本書『今もつながっている』（Still Connected: Family and Friends in America since 1970）では、1970 年から 2010 年までの、アメリカ人の主に家族や友人とのつながりに関する変化が、数多くの経年的なデータの読み解きを通して検証されている。これまでのアメリカ人の社会的つながりに関する研究では、人びとのつながりが失われつつあるということが声高に語られ続けてきた。これに対して、本書では、DDB ニーダム・ライフスタイル調査、ローパー調査、一般社会調査（GSS）などの大規模な社会調査を参照しながら、過去 40 年間でアメリカ人の社会的つながりは、その間の社会的変化にも関わらず、量と質において「ほとんど変化がなかった（not much changed）」という結論が導かれる。

本書の著者であるクロード・S・フィッシャー（Claude S. Fischer）は、現在、カリフォルニア大学バークレー校社会学部教授を務め、都市社会学などを専門にしている。フィッシャーの初期の関心は、都市における人びとの結びつきであった。フィッシャーは、都市化（アーバニズム）が、選択的な社会的ネットワーク形成を可能にするとし、都市生活が多様な下位文化を形成すると主張した（アーバニズムの下位文化理論）。これは、都市化がコミュニティの崩壊を導くものであるとみなす主流派のシカゴ学派や、アメリカ人の一般的見解に対する挑戦でもあった。また、都市・農村における電話の普及について考察した『電話するアメリカ――テレフォンネットワークの社会史』（Fischer 1992 ＝ 2000）において、電話という近代を代表するテクノロジーがアメリカ社会の人間関係を変えてしまったのだという技術決定論に対抗し、それらを使用する人びとが電話の利用の仕方を生み出していったという、社会構築主義の立場を強調した。

本書においてフィッシャーが主張するのは、まさにタイトルが示すように、アメリカ人は家族や友人と『今もつながっている』ということである。このことを実証するにあたって、全 7 章から成る本書ではまず、コミュニティの崩壊や「孤独なアメリカ人」の存在を強調してきたこれまでの研究の問題点を指摘し、アメリカ人の社会的つながりに関する調査の、体系的な再検討の必要性を説く（第 1 章）。次に、人びとのつながりを測定する手法や、それに関わる問題点を確認したうえで、本書が採用する方法的パースペクティブが示される（第 2 章）。その上で、家族関係（第 3 章）と友人関係（第 4 章）を区別しながら、その人数や彼らとの接触頻度がどのような変化を遂げてきたのかを、量的な観点から検証していく。さらには、いざという時にどれだけの人が助けてくれると期待できるのか（第 5 章）、また、関係性それ自体につい

て主観的にはどのように感じているのか（第 6 章）など、質的な観点も含めつつ、様々な検証を重ねていく。そして最後に、検証結果をまとめ、そこから導かれる結論が述べられる（第 7 章）。

以下では、まず、フィッシャーがどのような点からこれまでの研究に対して批判を加えているのか、そして、それらに対して、どのような形で反論を行っているのかを見ていく。その後、本書におけるフィッシャーの主張の詳細を確認し、その妥当性について考察していく。

繰り返され続ける「アメリカ人の孤独」

2006 年、ミラー・マックパーソン（Miller McPherson）らが、約 20 年間で孤独なアメリカ人が約 3 倍にまで増えたという研究論文を発表した。この報告を元に、USA トゥデイが「25％の米国人には信頼できる相談相手がいない」という記事（2006 年 6 月 23 日付）を掲載したことを皮切りに、各種メディアは「社会的孤立（“Social Isolation”）」、「友人のいないアメリカ人（“Friendless in America”）」といった内容で、数多くのセンセーショナルな報道を行った。フィッシャーはその後、この調査には手続き上の問題が存在し、結果にも誤りがあることを指摘している（Fischer 2009）が、本書の主たる目的は、そのような統計的手法に対して批判を行うことではない。

フィッシャーによると、アメリカ人の関心は常時この手の孤独やコミュニティの崩壊にあったという。その証拠に、リースマン（David Riesman）の『孤独な群衆』（1950）、ベラー（Robert Bellah）らの『心の習慣』（1985）、そして、パットナム（Robert Putnam）の『孤独なボウリング』（2000）は、その時代時代に人びとの関心を集めてきた。さらには、そのような孤独に対する危機感は、マスメディアを通して、定期的に発信されてきた。マックパーソンらの論文に端を発する今回の報道に限らず、たとえば 70 年代であれば、「社会的な流動性の高まりの中を生きるアメリカ人は、結びつきを失い、疎外され、あらゆる困難に出くわしたのだ」と、ジャーナリストのヴァンス・パッカード（Vance Packard）が警告し、既に注目を集めていた。

しかし、このような状況の下、アメリカ人の社会的つながりに関する経年的な変化が体系的に検討されることはほとんどなかったとフィッシャーは言う。実際、パッカードの主張の背景で、アメリカ人の居住地移動というのが、一定の減少傾向にあったように、「アメリカ人は以前よりも孤独になった」というこれまでの主張は、強迫的に語られてきたものに過ぎず、実証的な根拠に乏しいものであるとフィッシャーは考えているのだ。すなわち、本書でフィッシャーが対抗するのは、繰り返され続ける「アメリカ人は以前よりも孤独になった」という言説であると言えよう。

ところで、フィッシャーが論敵として据えているのは、『孤独なボウリング』を著したパットナムであるということは本書に目を通せばすぐに理解できる。というのも、パットナムだけが例外的に、数多くの経年的なデータを用いて、アメリカ社会におけるソーシャル・キャピタル（社会関係資本）の衰退を指摘しているからだ。『孤独なボウリング』における中心的関心は、フォーマルな組織や政治的行動への参加である。しかし、パットナムはその中で「インフォーマルなつながり」と題して、家族・友人・近隣の人びととの社会的つながりについても言及している。フィッシャーは「この研究は、確かに多くをこれに負う」

（本書 : 10）と述べながらも、「彼の指摘する変化は、たいていはわずかなもの」（本書 : 3）で、「分析にはニュアンスが込められている」（本書 : 3）と、パットナムの行った分析に対しては否定的である。つまり、本書を通してフィッシャーが試みているのは、体系的な検討を行っていく中で、パットナムの導いた「インフォーマルなつながりすらも行われなくなった」（Putnam 2000 = 2006: 133）という結論を棄却することなのである。

変化に「順応する」人びと

本書を読むにあたって注意したい点は、フィッシャーがこの 40 年間の社会的変化を無視しているのではないということである。あくまでもフィッシャーは、これまでの社会的変化の存在を認めた上で、本書の結論を導き出している。そして、社会的変化が人びとの関係性を変えうるということも認めている。重要なのは、この 40 年間の社会的変化が、人びとの結びつきを活発にさせたのか、それとも衰退させたのかということなのだ。

フィッシャーは、アメリカ人の人間関係のあり方に大きな影響を与えたであろう 4 つの主要な変化を指摘する。それは､技術的変化･人口統計的変化･経済的変化･文化的変化であるという。技術的変化としては、車・飛行機・E メール・携帯電話・テキストメッセージ（SMS）・ビデオリンク・SNS などの急速な広まりを挙げている。人口統計的変化としては、晩婚化・少子高齢化・移民流入・都市人口の増加と、それにともなう農村人口の減少を挙げている。経済的変化としては、戦後経済発展の終焉にともなう女性の労働力化や、深夜や週末における標準外時間労働の増加などを挙げている。そして、文化的変化としては、女性役割の変化や男女平等の加速化を特に大きなものとして挙げている。たとえば、車や携帯電話の登場が人びとの結びつきにかかるコストを大幅に軽減したことや、深夜・週末における労働が人びとの結びつきに時間的な制約を設けたことを想像するのは特に難しいことではない。

このようなアメリカにおける大きな社会的変化を確認した上で、フィッシャーは本書でたどり着く結論に対して次のような説明を行う。

> 1970 年からのアメリカでの社会的変化にもかかわらず、家族や友人との結びつきは強固だったということと、社会的つながりは残り続け、形態や機能を保ったということがわかるだろう――言い換えれば、ほとんど変化がなかったということになろう。ひょっとすると、先に論じたばかりのいくつかの展開は、お互いに補いあっていたのかもしれない。たとえば、（中略）、多くの母親が労働力となることは、アメリカ人の隣人との関わりを減らすかもしれないが、ほぼ同じ程度、同僚との関わりを広げるだろう。さらに、これらの技術的、人口統計的、経済的、文化的展開は、どんなに重要に見えたとしても、家族や友人との結びつきを十分に崩壊させるには不十分だったのかも知れない。なぜなら、これらの結びつきは人びとにとって特に重要であり、それゆえにとりわけ、変化に対して弾力性がある（resilient）からだ。（本書 : 9）

「人びとは嵐の海の中で、よりしっかりと身近な家族や友人を維持するにちがいない」（本書 : 10）と、新たな社会的環境においても、重要な関係性を維持することで「順応する（“Adapt”）」（本書 : 9）というのは、まさにフィッシャーが採用する社会構築主義的な発想である。

ここで、各章での検証を通してフィッシャーが導いたことを確認しておこう。まず、社会的に孤立したアメリカ人はわずかで、その割合も変わっていない。そして、親しい家族や友人の数というのは、これまでと変わらないままである。さらに、ディナーパーティーのような家の中での活動を除けば、人びとはそれぞれに集っているし、一方、電子的なコミュニケーションにいたってはより頻繁に行われている。加えて、家族や友人からの援助もこれまで通り期待でき、人びとが関係性それ自体についてどう感じているかについてもそれほど大きな変化はない。

また、フィッシャーはここまでの検証を行っていく中で、パットナムが『孤独なボウリング』の中で提示したものと同一のデータも使用している。当然、パットナムの主張を反証するためには、それらのデータを説明し直す必要がある。たとえば、パットナムが指摘する「インフォーマルなつながり」の急激な減少というのが、「とてもよくある（“frequently”）」という回答に恣意的に注目した結果なのだとフィッシャーは考える。調査結果には「とてもよくある」という回答から「よくある（“fairly often”）」という回答への推移は見られるものの、「あまりない（“not too often”）」、「ほとんどない（“seldom”）」、「まったくない（“never”）」と回答する人の割合には、ほとんど変化が見られないのだという。

おわりに

経年的な変化を観察することでわかったのは、「アメリカ人は以前よりも孤独になった」ということが、データからは必ずしも裏付けられないということであった。また、その過程で、パットナムが指摘した「インフォーマルなつながり」の衰退も、それほどまでには急激でないことが確認された。この点、過度にアメリカ人の孤独やコミュニティ崩壊に目を向けてきたこれまでの研究との距離をとることを目指した本書の試みの重要性は大きい。

しかしながら、アメリカ人のつながりはこの 40 年間で本当に「ほとんど変化がなかった」のであろうか。これまでの社会的変化を踏まえると、アメリカ人のつながりというのは、そのつながり方においては変化を見せたが、それにもかかわらず、（特に、親密な間柄の人たちとの）つながりの総量という点ではあまり変化がなかったと言った方が、より適切ではないだろうか。フィッシャーは、夫婦で過ごす時間が短くなったかわりに、その時間が子どもと過ごす時間に充てられているように考えていたり、家で友人をもてなす機会が減ったかわりに、電話や手紙で連絡する機会が増えたのだと考えているが、果たして人とのつながりというのは、そのつながり方の違いを考慮せずに、どれだけ単純に足し合わせることができるものであるのか。

現在の社会的つながりのありようを規定するのが、どのような社会的環境なのかということについて、本書は明確な回答を与えていない。そして、そのことを解明することは困難であるとフィッシャーは述べている。つまり、アメリカ人の社会的つながりが維持されているとするならば、その大きな要因が、社会

的変化が相殺しあった結果としてあらわれたものなのか、それとも、家族や友人関係の弾力性（resilience）なのかは判別できないということである。もし、今後目指されるべき課題を挙げるとするならば、それは、社会的変化を変数としてつながりの構造的変化を観察し、つながりの構造的変化をとらえた上で社会的つながりを比較していくという、地道なアプローチを行っていくことだと言うことができるだろう。

文献

Fischer, Claude S. 1982. *To Dwell among Friends: Personal Networks in Town and City*. Chicago: University of Chicago Press. (＝松本康・前田尚子訳　2002 『友人のあいだで暮らす――北カリフォルニアのパーソナル・ネットワーク』未來社。)

Fischer, Claude S. 1992. *America Calling: A Social History of the Telephone to 1940*. Berkeley: University of California Press. (＝吉見俊哉・松田美佐・片岡みい子訳　2000 『電話するアメリカ――テレフォンネットワークの社会史』 NTT出版。)

Fischer, Claude S. 2009. "The 2004 GSS Findings of Shrunken Social Networks: An Artifact?" *American Sociological Review* 74(4): 657-69.

McPherson, Miller, Lynn Smith-Lovin, and Matthew E. Brashears. 2006. "Social Isolation in America: Changes in Core Discussion Networks over Two Decades." *American Sociological Review* 71(3): 353-75.

Putnam, Robert D. 2000. *Bowling Alone: The Collapse and Revival of American Community*. New York: Simon & Schuster. (＝柴内康文訳　2006 『孤独なボウリング――米国コミュニティの崩壊と再生』 柏書房。)